



映画「ブリューゲルの動く絵」より  
© 2010, Angelus Silesius, TVP S.A



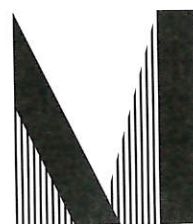
## 風車は回り、世の営みはくり返される

ブリューゲルは、混沌たるこの世のすべてを二次元のキャンバスに描きつくそうとした。雄大な自然とそこに生きる者たち、目の前のフランドルの野山と、彼が独自に創りあげた奇怪な風景、ころんとしたユーモラスな体型を持つ人々と、その見た目を裏切る残酷さあまりない行為、平和な日常、そしてそれを侵食する凄絶な非日常……。絵の細部へ細部へと分け入ってみれば、一見のどかだった世界がべろりと剥けて、人間の営みの残酷さがじわじわ迫ってくる。

マイエフスキ監督も、ブリューゲル作品のそうした強烈さにノックアウトされ、どうにも画中の登場人物たちを動かしてみたくなくなったのだろう。CGやデジタル加工などの最新技術を駆使し、これまで体験したことのない不思議な映像感覚を楽しめる。と同時に、絵画を鑑賞し解釈する困難と歓びをも改めて教えられよう。舞台は16世紀フランドル。ブリューゲ

ルが生きた時代だ。スペイン・ハプスブルク家の圧制に苦しむ民衆は、つねに死と隣り合わせの日々を送っている。あまりに長く恐怖に支配されてきた社会では、誰もがもう抵抗する力すら奪われている。ブリューゲルはこれまでも同じことが——風車の動きのように——ずっと繰り返されてきたことを示すため、時代をはるかに遡ったキリストのゴルゴダへの道行をもさりげなく画面にはめこんだ。映画もまた、愛する者を虐殺され絶望に沈む人々の物語を、静かな怒りをこめて描写する。

——絵から人間が飛び出し動き出す。確かに面白いが、しかし見終えて複雑な思いを持たざるを得なかった。なぜならかつてビデオもテレビもなかった時代には、こんな仕掛けをせずとも、二次元の絵はちゃんと動いて見えたはずなのだ。3D映画にも感じるのだが、現代人の想像力は衰退の一途なのではあるまいか。



## MOVIE

ブリューゲル絵画を実写化

中野京子(作家、独文学者)=文  
Text by Kyoko Nakano

### 映画「ブリューゲルの動く絵」

16世紀ネーデルランドの画家ピーテル・ブリューゲル(1525/30頃～1569)の作品(十字架を担うキリスト)(1564)は、十字架を背負ったキリストの受難を当時のフランドルの民衆文化に置き換えて描いた絵画。本映画は、画中に描かれた人物や出来事などを時代背景とともに実写化した実験的作品。監督はポーランドのアーティスト、レフ・マイエフスキ。映画「バスキア」の脚本・製作ほか多くの映画を手がける。12月17日より渋谷・ユロススペースにて公開。配給=ユロススペース+ブロードメディア・スタジオ/配給協力=コミュニティシネマ・センター